

北海道伊達高等学校

課 程 全 日 制
学 科 普 通 科
生徒数 391名

1 取組の特徴

ホームルーム及び生徒会等における活動やボランティア活動などを通して、人間関係を形成する力やコミュニケーション能力を高めるとともに、自己有用感を育成する指導や自己理解・自己管理能力を高める指導の改善・充実を図る。

2 取組のねらい

- 1 コミュニケーション能力等を高める活動等の組織化・体系化
- 2 コミュニケーション能力等に関するアセスメントの知識や手法の習得
- 3 自己理解・自己管理能力を高める指導の改善・充実

<組織図>



3 取組の経過

- | | |
|---|--|
| <p>【5月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長流川河口清掃（1年） <p>【6月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・観光客動向調査協力（2年） ・第1回「ほっと」・「アセス」（全学年） <p>【8月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・亘理高校訪問団との交流（生徒会・放送局） ・伊達市武者祭り市民山車参加（野球部等） <p>【9月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ほっと」・「アセス」研修会（教員） <p>【10月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーション能力研修（希望生徒） | <p>【11月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市障がい者スポーツ大会運営補助（1年） ・第2回「ほっと」・「アセス」（全学年） ・校内研修「SCによる事例研究」（教員） ・伊達地区学校ネットワーク会議（伊達市内全学校参加）での成果発表 ・異世代交流－老人ホーム訪問（3年） <p>【12月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園実習（3年選択科目） <p>【2月】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・伊達高等養護学校訪問（剣道部） ・伊達市雪祭りボランティア（2年） ・第3回「ほっと」・「アセス」（1、2年） |
|---|--|

4 取組の内容

1 長流川河口清掃ボランティア

- (1) 日 時：5月13日（火）5、6校時
- (2) 対 象：1学年生徒（102名）
- (3) ねらい：野鳥の繁殖地である長流川河口の清掃活動を通し、自然環境保全及び生命尊重に寄与する精神を育てるとともに、清掃活動により達成感や成就感、自己有用感等を体験し、人間関係を形成する資質や自己理解及び自己管理能力の養成等を図る。
- (4) 成 果：事後アンケートには、「友だちと力を合わせて大きなゴミを取り除いたので、気持ちがよかった。」「今までこんなに働いたことがなかったので疲れたが、来年もまたやりたい。」などの感想があった。また、各企業や団体等から参加されている方々や、普段接する機会がない50代以上の異世代の方々と交流する貴重な機会となった。



2 市障がい者スポーツ大会運営補助

- (1) 日 時：11月16日（日）
- (2) 対 象：ボランティアサークル 希望生徒（36名）
- (3) ねらい：多くの市民ボランティアとともに大会運営を行うことを通して、生徒一人一人に地域社会の一員であることの自覚を促すとともに、ボランティア活動への関心・意欲を高める。

3 「コミュニケーション能力を高めようの会」実施

- (1) 日 時：第1回 7月8日（火）、第2回 10月27日（月）
- (2) 対 象：希望生徒（30名）
- (3) ねらい：スクールカウンセラーを講師とした集団カウンセリング研修を通して、人間関係を保つ留意点や工夫について理解を深めるとともに、コミュニケーション能力を高める関心・意欲を醸成する。

4 異世代交流

- (1) 日 時：11月17日（月）、19日（水）、26日（水）、12月1日（月）
- (2) 対 象：3学年生徒全員
- (3) ねらい：養護老人ホームを訪問し、多くのお年寄りや介護職員と交流を行い、地域社会の一員である自覚を深めるとともに、自尊感情の涵養を図る。



5 次年度に向けて

1 成果

- (1) 自己中心的な考え方に固執する傾向が見られるが、やり甲斐を感じられることや他者に感謝されるようなことには前向きに取り組むことができるようになってきている。
- (2) 「ほっと」の結果を個人面談等の資料として活用し、HR指導等に役立てている。
- (3) 昨年度に比べて欠席日数が減った。（のべ1,844日→のべ1,552日）
- (4) 保健室の利用者について、メンタルを理由とする相談者が減った。（190人→155人）
- (5) 生徒会役員が自主的・自発的に挨拶運動を企画運営するなど、生徒会活動の意義等を深く理解し実践できるようになってきた。また、また、ボランティア活動については、休日でも積極的に参加するものが増え、各団体や主催者等から賞賛されるようになった。
- (6) ボランティア活動で定着しつつある規範意識や自己指導能力が、授業規律の確立やキャリアプランニング能力の育成に繋がりがつつある。

2 課題

- (1) 個別指導と集団指導のバランス
 - ・「ほっと」を活用した定期的な調査結果を「予防的指導」に生かすだけでなく、「成長を促す指導」に活用することを、教員間の共通理解とする必要がある。
 - ・生徒の能力・適性、興味・関心、家庭状況が多様であることから、集団指導を通じた「個の育成」に十分留意する必要がある。なお、その際、生徒一人一人の特性に合わせて、「成長を促す個別指導」・「予防的な個別指導」・「課題解決的な個別指導」のいずれかに力点を置いた指導を心がける必要がある。
- (2) キャリア教育との連動
 - ・インターンシップ（事前・事後指導を含む）等で人間関係形成能力や課題対応能力を伸ばさせながら自尊感情を高め、また、授業のなかでグループワークやペアワークを積極的に取り入れて、豊かな人間関係を作りながら、成就感・達成感等を味わわせる指導を一層工夫・改善する必要がある。

北海道追分高等学校

課 程 全 日 制
学 科 普 通 科
生徒数 83名

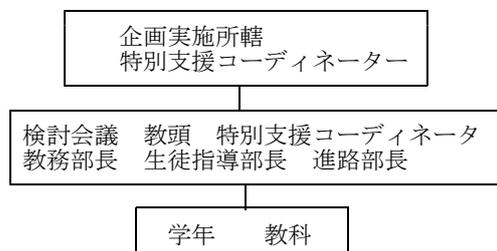
1 取組の特徴

スクールカウンセラー（以下SC）との連携やパートナーティーチャー（以下PT）を交えた事例検討会により、個々の生徒に対応した支援を行うフォローアップ体制とともに、発表力やコミュニケーション能力を高める取組を教科に取り入れたステップアップ体制を学校全体での推進する。

2 取組のねらい

- 1 生徒集団の実態の的確な把握と課題解決
- 2 コミュニケーションスキル向上を意識した教科指導やピアサポートトレーニングの実施に向けた教職員の力量の向上
- 3 生徒の表現力及び自己有用感の向上

<組織図>



3 取組の経過

- | | |
|--|--|
| <p>【4月】ピアサポート研修
(生徒会役員、学級代表)</p> <p>【5月】教科学年生活会議</p> <p>【6月】ピアサポート研修 (生徒会役員)
職場体験学習
「ほっと」実施 (1回目)</p> <p>【7月】職場体験学習報告会 (2年)
学校祭における係活動</p> <p>【8月】ボランティア活動 (グループホーム祭2回)</p> <p>【9月】校内研修 「アセス」の実施</p> | <p>【10月】見学旅行 宿泊研修</p> <p>【11月】見学旅行報告会 (2年)
ピアサポート研修
(生徒会役員、学級代表)</p> <p>【12月】教科学年生活会議 (PT参加)
体育大会における学級活動</p> <p>【1月】学習成果発表会 (3年)</p> <p>【2月】ボランティア活動 (追分吹奏楽部)
「ほっと」実施 (2回目)</p> |
|--|--|

4 取組の内容

1 教科学年生活会議・校内研修

- (1) ねらい：前期中間考査及び「ほっと」の結果を基に学級集団の傾向を確認するとともに、専門家であるPTやSCを交えて、学級集団や個々の生徒へのアプローチの方法を検討する。
- (2) 対象：教員・PT・SC
- (3) 内容
 - ①教科学年生活会議
 - 5月13日 入学生の様子を中心に情報交流 PTより助言
 - 12月15日 1年間の生徒の様子について情報交流 PTより助言
 - ②校内研修
 - 9月1日 「ほっと」結果から学級の様子と課題、解決の方策について検討 (PT助言)

2 コミュニケーションスキル向上を意識した教科指導・ボランティア活動の推進
(1) ねらい：外部の異年齢集団との交流体験や学習内容の発表を行う場を設定することを通して、個々の生徒の自己有用感や表現力の向上を図る。

(2) 内容

- ①職場体験学習報告会（2年）
- ②見学旅行（英語課題：海外の人へ英語でインタビュー）・報告会
- ③授業における取組（異年齢交流学习・学習成果発表会）
 - ・生活福祉援助技術（3年）：町内養護老人施設、保育園、小学校との交流学习
 - ・生涯スポーツ（3年）：町内パークゴルフ協会との交流
 - ・家庭科（2年）：保育園児との交流
- ④町内施設におけるボランティア活動
 - ・ノーザンホースパークマラソンボランティア
 - ・福祉施設夏・秋祭りボランティア
 - ・安平町ロビーコンサートボランティア



3 校内リーダー研修におけるピアサポートトレーニング

(1) ねらい：コミュニケーションスキルトレーニングを通しピアサポートの実践力を身に付けることで仲間援助活動を行うことのできるリーダーを育成する。

(2) 対象：生徒会執行部・学級代表

- (3) 内容：①自己紹介・他己紹介
②コミュニケーション一方通行双方通行
③Iメッセージ・YOUメッセージ・アサーティブなコミュニケーション（学校祭に向けて）



「生徒の感想」

- ・コミュニケーションの取り方が分かったので実際にやってみようと思う。
- ・学校祭の準備に当たって、事前に話し合いの練習をすることができたことは良かった。

5 次年度に向けて

1 成果

(1) 中途退学者数の推移

平成25年度の退学者数が8名から今年度0名に減少した。特に1年生については、平成25年度6名から26年度0名に減少している。これは、昨年度の反省をもとに学校生活へ無気力な生徒を出さないための教職員による早めの対応によるものと考えられる。

(2) ボランティア活動への参加人数の増加

平成25年度の参加人数は39名から今年度44名へ増加した。特に1年生は平成25年度14名から平成26年度21名に増加しており、学校生活への積極的な姿勢が見られる。

(3) アセスの経年比較

アセスの結果、2年生は1年時より教師サポート感53→58、友人サポート感51→54、3年生は2年時より教師サポート52→57、友人サポート52→54、向社会的スキル56→58と上昇した。

2 課題

(1) 学年の振り返りとして2月実施予定の「ほっと」結果の分析を十分に行い、支援が必要な生徒への個別支援と「ほっと」における4因子の底上げを図る取り組みを継続する。

(2) 進路実現に向け、発表力やコミュニケーション力を付けるための取組をさらに学校教育全体で継続する。

3 次年度に向けて

(1) 中学校との連携による入学生徒の実態把握と6月「ほっと」及び「アセス」の実施による学級集団の把握と対応を検討。（教科学年生活会議・PT・SCによる助言）

(2) 2、3年生への進路活動を意識した教科指導

- ・プレゼンテーション力のスキルアップ
- ・コミュニケーションに関する講演やトレーニングの継続実施

北海道登別青嶺高等学校

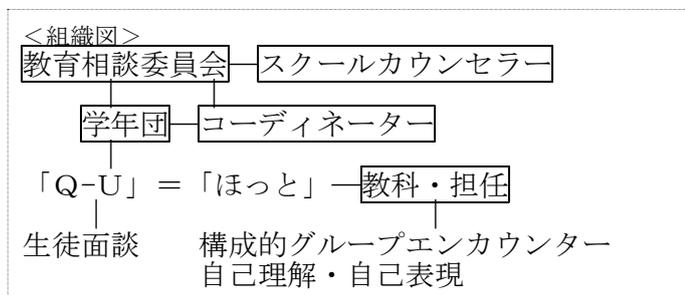
課 程 全 日 制
 学 科 普 通 科
 生徒数 4 5 9 名

1 取組の特徴

「携帯電話預かり指導」等、校内における生徒同士のコミュニケーションの機会を増やすための取組をはじめとした生徒指導の強化を図るとともに、構成的グループエンカウンターによる早期の人間関係づくりに取り組む。「Hyper-QU」や「ほっと」等のアセスメントを活用したクラス経営及びスクールカウンセラーによる個別相談と情報共有による教育相談体制の確立する。

2 取組のねらい

- 1 良好な人間関係の構築
- 2 「Hyper-QU」・「ほっと」の分析による、きめ細かい生徒対応と生徒指導の取組の検証
- 3 スクールカウンセリングによる個別の生徒の困り感への対応
- 4 自己理解・自己表現を高める取組の推進



3 取組の経過

- 教育相談委員会の月例開催
 - スクールカウンセラーによる個別カウンセリング (年20回)
- | | |
|-----------------------|--|
| 【 4月】 宿泊研修グループエンカウンター | 【 8月】 「ほっと」実施：1～3年 |
| 【 6月】 「Q-U」実施：全クラス・分析 | 【10月】 自己表現スキルアップ：見学旅行
研修報告会：2年、職業調べクラス発表：1年 |
| 【 7月】 エゴグラムによる自己理解：1年 | 【11月】 外部講師によるマナー講座：2年 |
| | 【 2月】 「ほっと」実施：1・2年…分析 |

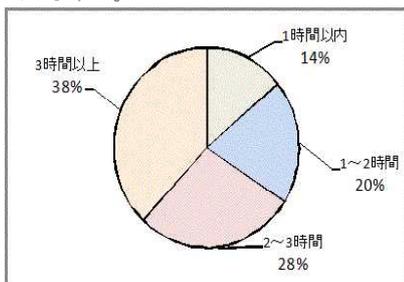
4 取組の内容

1 携帯電話預かり指導と人間関係能力の育成<生活アンケートに見る携帯電話の状況>

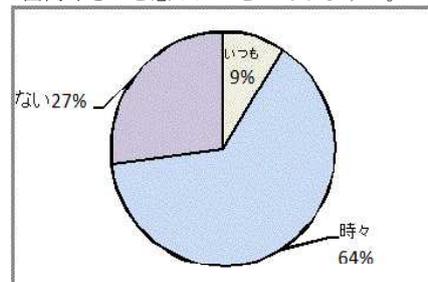
12月に生徒指導部が生徒を対象に実施している「生活アンケート」では、本校の携帯電話使用の実態として、3時間以上38%、2～3時間が28%で7割近くが1日2時間以上利用すると回答している。また、「『無料通話アプリ』上の付き合いをときどき・いつも面倒くさいと感じる」が73%もいることから、必ずしも「無料通話アプリ」等のソーシャルネットワークツールを手放して喜んで利用しているわけではないという結果となった。

この上、学校で日中の使用を許可すれば、使用時間は延びることから、ルールを決めて規制することが、健全育成の観点からも有効であることが明らかとなった。

あなたは一日どのくらい携帯電話を利用していますか。



あなたは「無料通話アプリ」上の付き合いを面倒くさいと感じたことがありますか。



4 取組の内容

2 早期の人間関係構築の取組

＜宿泊研修（1学年）における集団行動とグループエンカウターの実施＞

昨年度の宿泊研修から、宿泊研修を生徒同士の交流と学級の基盤づくりと位置付け、集団行動や構成的グループエンカウターを教員または施設職員の協力によって実施している。

「集団行動ではみんなで力を合わせて行動する楽しさを学びました」「グループエンカウターでは他のクラスとも交流できるような遊びを考えてくれて友達も増えて楽しかった」「集団行動やグループエンカウターではまだ話していない友達とも話すことが出来たのでとてもよかった」「グループエンカウターが一番よかった。話せてない子とたくさん話をして交流できてよかったです」といった感想が多く、アンケートにも4点満点の4及び3点と回答した生徒が「集団行動はきびきびと動けた」90%、「グループエンカウターを通して積極的に交流できた」90%と評価も高かった。



3 発表スキルアップの取組

＜見学旅行（2学年）における研修発表会の実施＞

2学年が見学旅行から帰着後、研修班ごとにその成果を発表した。研修班をクラスの壁を取り払って構成し、交流の枠を広げた。発表会は学年全体で行うこととし、多くの人数に理解してもらうための発表の工夫などに留意しながら、発表会を実施した。発表発表後、使用した模造紙を校内に展示するなど全校的な交流にも役立てた。



5 次年度に向けて

1 成果

- (1) 中途退学者数及び不登校生徒数は低く推移しているが、これは本取組等による成果であると思われる。
- (2) 「Q-U」によるクラス分析では、全クラスで「学校生活意欲総合点」が全国平均を上回るなどクラスの状態はよい。クラスの要支援生徒への個別カウンセリングを実施し、改善を促している。
- (3) 本校における「ほっと」による生徒のコミュニケーションスキルの概況は、概ね全道平均を上回っていて、社会的スキルがバランスよく身に付いている。中でも遵守・礼儀・自律が高い傾向を示していることから、高い規範意識に基づいたコミュニケーションスキルが構築されている。
- (4) 例年年度末に実施している生徒アンケート（4点満点）を現3年生の1年生時と比較してみると、「私は友人との人間関係に満足している」3.01→3.28、「ホームルームはまとまりがあって楽しい」2.39→3.08となっており、3年間で伸長していることが分かる。

2 課題

- (1) 近年、保健室利用者が増加傾向にある。「学習について行けない」、「クラスの生徒になじめない」等の訴えが多い一方、個別カウンセリングを実施できないなど対応に苦慮している。
- (2) 保護者との連携の在り方について、特に特別支援教育に関わる場面では効果的な連携が回りにくい。

3 次年度に向けて

- (1) 生徒理解を進め、規範意識を醸成する指導を学校全体バランスのよい連携の在り方について、教育相談委員会をセンターにして情報発信、情報共有及び実践と検証を進めていく方策を探る必要がある。
- (2) 特別支援教育に関する教員の理解を進め、具体的対応の在り方や、教員連携の在り方など研究を進め、よりよい対応についてスキルアップを図る必要がある。

北海道富川高等学校

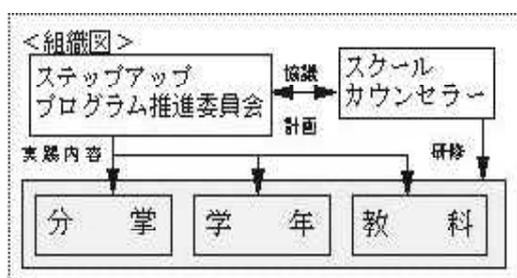
課程 全日制
 学科 普通科・商業科
 生徒数 103名

1 取組の特徴

本校は、生徒にピア・サポート活動を広めることにより、生徒のコミュニケーションスキルの向上や生徒同士が互いに支えあえる関係づくりを図っている。

2 取組のねらい

- 1 定期的なピアサポートトレーニングの実施によるピアサポーターの育成。
- 2 キャリア教育プログラムの一つとして位置付け、生徒のコミュニケーションスキルの向上を図る。
- 3 教員が生徒理解や教育相談に日常的に活用できる能力を身に付けるための研修を実施する。



3 取組の経過

- | | |
|---|--|
| <p>4月・宿泊研修施設でのコミュニケーションスキルを実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3年生商業科 SGE(非言語のコミュニケーション) (LHRで実施) ・ピアサポートトレーニング① <p>5月・ピアサポートトレーニング②</p> <p>6月・トレーニング(朝学習でSGE情報でつながろう、電卓タッチなど)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ピアサポートトレーニング③ <p>7月・調査(全学年に対して「ほっと」「アセス」を実施)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ピアサポートトレーニング④ <p>8月・2年ソーシャルスキルトレーニング(電話の対応) (LHRで実施)</p> | <p>10月・2年生 ソーシャルスキルトレーニング(見学旅行に向けて)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3年生 コミュニケーションスキルトレーニング <p>12月・ピアサポートトレーニング⑤</p> <ul style="list-style-type: none"> ・調査(全学年に対して「ほっと」「アセス」を実施) <p>1月・1年生コミュニケーションスキルトレーニング</p> <p>3月・ピアサポートトレーニング⑥</p> |
|---|--|

4 取組の内容

1 「ほっと」「アセス」の活用

① ねらい

子ども理解支援ツールを活用して子どもの内面性を分析し、人間・環境関係で予想されるトラブルを未然に防ぐ術を身に付ける。

② 対象

全校生徒

③ 主な実施内容

- ・年2回子ども理解支援ツールを活用して調査を行う。
- ・データに基づき、担任・保護者・スクールカウンセラーと連携・連動し生徒の支援に取り組んでいる。

④ 成果

- ・調査結果に基づいた個別相談充実
- ・担任、保護者、スクールカウンセラーとの連携強化
- ・今後のトレーニング方法の検討

2 SGEによる自己開示と他者の認知

① ねらい

自分を表現する機会を作るとともに、自分とは違う他者の考えや行動を受け入れる機会を作る。

② 対象

1年生 商業科6名 普通科30名

2年生 商業科21名 普通科13名

各学年で、LHRを使って実施

③ 実施内容

非言語のコミュニケーション、自分を知る、仲間を信頼しよう、聴く力をつける、伝える力をつける

④ 成果

普段一緒のクラスにおいても自己開示はとても勇気のいることであるが、自分のことを伝えたり仲間のことを知ったりを重ねていくことで、自己肯定感が増した。



5 次年度に向けて

1 成果

- ア コミュニケーションスキルを高めることで、人間関係が良好になり他者理解へという環境づくりの基盤を強固にすることができた。
- イ 学校生活で中で必要な思いやり、助け合い、支え合いの関係が出来つつある。
- ウ ピア・サポート研修会により一定の理解が教員全体に深まった。

2 課題

- ア 全生徒対象の校内ピア・サポート研修の活発化
- イ スクールカウンセラーと連携した計画的なスキルアップトレーニングの実施

3 次年度に向けて

- ア ピア・サポート研修の活性化
- イ 「ほっと」「アセス」の継続的な活用と分析

北海道大野農業高等学校

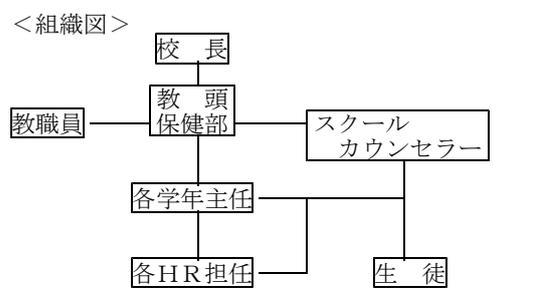
課程 全日制
 学科 農業科
 生徒数 356名

1 取組の特徴

- (1) 「ほっと」等の結果を活用したアセスメントや学年別生徒理解会議の実施による生徒状況の把握。
- (2) 農業高校の特色を生かした販売会や異年齢交流の活動を通じた、コミュニケーションスキルと自己肯定感の向上。
- (3) スクールカウンセラーと教員のコンサルテーションによる生徒状況の把握。

2 取組のねらい

コミュニケーションが苦手な生徒や集団生活になじめない生徒、心的な悩みを抱えている生徒が多く見受けられることから、学校生活や卒業後の社会生活における円滑な人間関係を構築できるコミュニケーションスキルを身に付けること、自己有用感を向上させることを目的としている。



3 取組の経過

5月	第1回大野幼稚園との交流会 第1回特別支援学校との交流会 高齢者との家庭菜園交流(～11月) 苗物販売会(販売実習) 第1回学年別生徒理解会議	10月	食彩フェア販売会 老人ホーム「美ヶ丘」収穫感謝祭ボランティア 第4回大野幼稚園との交流会 緑園祭(学校祭)販売実習 交通安全事故なしキャンペーン
6月	アンテナショップ「鹿島屋」生産物販売(～12月、計7回開店) 第1回北斗市立市渡小学校との交流会	11月	学校環境適応感尺度「アセス」の実施
7月	子ども理解支援ツール「ほっと」の実施 第2回大野幼稚園との交流会 第2回特別支援学校との交流会	12月	サンタクロース活動
9月	第3回特別支援学校との交流会 第3回大野幼稚園との交流会	1月	1学年集団カウンセリング(宿泊研修)
		3月	第2回北斗市立市渡小学校との交流会 教育相談についての研修会

4 取組の内容

1 北斗市立市渡小学校との交流会

- (1) 実施日：6月2日(月)、3月実施の予定
- (2) 対象：農業科水稻班
- (3) 内容：6月：田植え 3月：餅つき、試食
(9月に予定していた稲刈りは、天候不良により中止)



(4) 成果と課題(○は成果、●は課題)

- 異年齢交流を通して、コミュニケーションスキルの必要性とコミュニケーションのポイントを学ぶことができた。
- 小学生の活動の支援において、自らが学習したことを小学生に教えることにより、学習内容の定着を図ることができた。
- 生徒による小学生への活動支援が円滑に行われ、小学生の農業に対する興味関心の喚起を図ることができるよう、生徒の学習内容の理解を深めるための指導を充実させる必要がある。

2 苗物販売会

- (1) 実施日：5月17日(土)
- (2) 対象：園芸科、生活科学科
- (3) 内容：生徒が栽培した野菜及び草花の苗の一般客への販売
- (4) 成果と課題(○は成果、●は課題)

- 販売物の好調な売上げにより生徒が達成感を得るとともに、販売接客マナー等の実践的な能力を身に付けることができた。
- 販売物についての知識の不十分が、円滑なコミュニケーションの支障となる場面が見受けられたため、コミュニケーションを支えるための「確かな学力」の育成が必要である。



3 1学年集団カウンセリング(宿泊研修)

- (1) 実施日：1月28日(水) 宿泊研修1日目
- (2) 対象：1学年
- (3) 内容：構成的グループエンカウンター(SGE)
(10回ジャンケン、「…と言えば」他)



(4) 成果と課題(○は成果、●は課題)

- 活動を通して、生徒は相互理解をさらに深めることができた。また、ゲーム形式の活動を行うことにより打ち解けた雰囲気を作り出し、集団における生徒の感情表現への抵抗感を緩和することで、人間関係の円滑な構築を図ることができた。
- 今後、SGEの取組の充実を図るため、SGEを通して本校の生徒に身に付けさせたい能力について、「ほっと」の活用や生徒観察を通して明確にする必要がある。

4 取組の内容

4 「ほっと」の分析結果について

- (1) 実施日：7月10日(木) LHRで実施
- (2) 対象：全学年
- (3) 検査結果

- 1 学年：13要素偏差値において、全クラス50.0以上の項目は「礼儀」「参加」「配慮」の3つであった。4因子得点ではどのクラスも「関係維持」が一番高く、その次が「自己統制」であった。
- 2 学年：13要素偏差値において、全クラス50.0以上の共通項目はなかった。4因子得点では4クラスのうち3クラスにおいて「関係維持」が一番高く、一番低かったのは4クラスとも「仲間強化」であった。
- 3 学年：13要素偏差値において、全クラス50.0以上の項目は「遵守」「学業」の2つであった。4因子得点ではどのクラスも「関係維持」が一番高く、その次に高かったのは4クラスのうち3クラスが「自己統制」であった。

5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

- ・中途退学者数は14名であり、前年比3名の減少であった。
- ・不登校生徒は昨年度に引き続き、今年度も0名であった。

イ その他の指標による評価

- ・保健室年間利用者数は増加した。
- ・1人あたりの欠席日数は減少した。
- ・ボランティア活動の参加人数は増加した。

ウ 子ども理解支援ツール「ほっと」の実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

アセスメントの結果から、本校の生徒は進級するにつれて、学校生活への積極性が高まることがわかった。本校における実習や交流事業を通して、生徒は自分の居場所を見つけ、学校生活に対する安心感を得られることによるものと推察される。

エ 生徒の変容した姿

コミュニケーションが苦手な生徒や集団生活になじめない生徒が、本校における異年齢交流や販売活動を通してコミュニケーションスキルを身に付けるとともに、円滑なコミュニケーションを行うための継続的な学習の必要性を認識することができた。

進路活動において、積極的に行動し、2月末現在において就職内定率100%、進学決定率97.9%と3年生のほぼ全員が卒業後の進路を決定した。

2 課題

ア 「ほっと」などを使ったアセスメントの結果を生徒指導に生かすため、全職員で研修を深める必要がある。

イ 入学当初から高校生活に意欲を持たない生徒へのアプローチの確立を図る必要がある。

3 次年度に向けて

ア 今まで以上に、生徒自身が意欲的に取り組める交流活動の工夫・改善を図る。

イ スクールカウンセラーからアドバイスを取り入れ、より効果的にアセスメントを行い、生徒の状況を把握する。

北海道函館中部高等学校

課 程 定 時 制
学 科 普 通 科
生徒数 110 名

1 取組の特徴

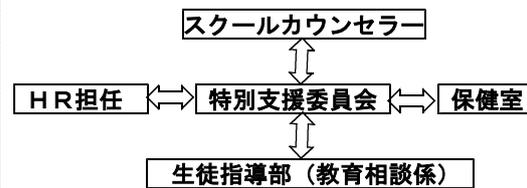
低学年（1・2年生）で人とつながる力をつくり、3・4年生で社会とつながる力をつくる。4年間という定時制の特徴を生かし、基礎学力を身に付け、自信を持ち進路を開拓する生徒を育てる。

2 取組のねらい

低学年（1・2年生）で人との付き合い方を学び、コミュニケーション能力を育成するとともに、クラスの中での居場所を確保する。そのために、構成的グループエンカウンター（SGE）の時間を1年生、2年生の順に多く配当するほか、3・4年生には卒業後の進路決定を意識したソーシャルスキルトレーニングを実施する。

個別カウンセリングにおいては、スクールカウンセラーによる専門的なアドバイスと支援を提供し、教職員間で生徒の情報を共有することにより組織的な支援を行う。

<組織図>



3 取組の経過

年度前半

2人のスクールカウンセラーに依頼し、構成的グループエンカウンター（SGE）30時間、個別カウンセリング30時間を計画した。全生徒を対象としたSGEの実施内容を検討し、必要な時数を確保した後、残り時数を個別カウンセリングとする計画を立てた。1年生は居場所づくりや人間関係づくりが必要であるため早い時期でのSGEの実施が望ましいが、今年度は6月中旬に開始した。

年度後半

2年生の宿泊研修や3年生の見学旅行など、各学年の旅行行事の円滑な実施につながるよう、SGEの内容を工夫した。3・4年生では社会に出てからの人間関係づくりを意識した活動を盛り込んだ。

年度末

計画通りに進めることができ、生徒への効果も顕著であった。個別カウンセリングは生徒及び保護者からのニーズが高く、計画していた時間では足りなかったため、時間を追加し対応した。カウンセリングの必要性を再認識した。

4 取組の内容

コミュニケーションスキル（特に質の向上）の育成を図るため、次の取組を行った。

1 個別カウンセリング

- (1) 実施時間：授業開始前（15:30～17:20）
- (2) 実施者：スクールカウンセラー（1名で対応）
- (3) 対象生徒数：1回につき1～2名
- (4) 相談内容：家庭生活、学校生活、友人関係、進路、体調、アルバイトなどの相談
アサーショントレーニング
- (5) その他：相談生徒に関するHR担任・養護教諭との情報交換、教頭への報告

＊ 個別カウンセリングから外部関係機関との連携強化へ

個別カウンセリングについて、今年度は、生徒だけではなく保護者にも対象を拡げた。緊急な場合にはスクールカウンセラー、主治医、保護者、担任、養護教諭の五者からなる緊急会議を実施し、外部関係機関と連携することにより、適切で充実した支援を行うことができた。

2 アサーション教室

- (1) 実施回数：月に1回程度（個別カウンセリングを行わない日）
- (2) 実施時間：授業開始前（15:30～17:20）
- (3) 実施者：養護教諭
- (4) 対象生徒：希望者（各回10名程度）
- (5) 内容：アサーショントレーニングの実施。主に個別カウンセリングを受ける機会の多い生徒が参加している。個別カウンセリングと併用することにより、悩みを抱えた生徒のケアに役立っている。

3 SGE（構成的グループエンカウンター）

- (1) 実施時間：総合的な学習の時間やLHR
- (2) 実施者：スクールカウンセラー1名
- (3) 実施内容：
 - 6月【1年生】人間関係づくりのためのSGE「エゴグラム」
 - 【1年生】人間関係づくりのためのSGE「ストレスマネジメント」
 - 【1年生】進路に役立つソーシャルスキルトレーニング
 - 8月【1年生】人間関係づくりのためのSGE「上手な聴き方スキル」
 - 9月【全学年】「ほっと」1回目実施（集計後、スクールカウンセラーに分析依頼）
 - 【2年生】宿泊研修に向けての人間関係づくりのためのSGE「幸せの条件」
 - 10月【1年生】進路に役立つソーシャルスキルトレーニング「就職する価値」
 - 【2年生】2学年宿泊研修 人間関係づくりのためのSGE「葉書コラージュ」
 - 【3年生】見学旅行に向けての良い人間関係づくりSGE「相手を傷つけない言い方」
 - 11月【4年生】人間関係づくりのためのSGE「幸せの条件」
 - 12月【1～3年生】子ども支援理解ツール「ほっと」実施
 - 2月【1年生】人間関係づくりのためのSGE【職員】スクールカウンセラーによる職員研修



5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

- ・中途退学者数は前年度の11名から11名減の0名である。
- ・不登校生徒数は前年度の5名から5名増の10名である。

イ その他の指標による評価

- ・保健室利用者数は昨年度より減少した。

ウ 子ども理解支援ツール「ほっと」の実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

2回実施（9月、12月）

・1年生

標準的な範囲にあるが、1回目と比べ2回目では参加意欲や周囲への配慮、緊張感等が大きく下降している。

・2年生

標準的な範囲にある。1回目と比べ2回目では参加意欲や他人への称賛、ルールの遵守等が上昇している。

・3年生

標準的な範囲にある。1回目と比べ2回目では意思の表明や周囲への配慮、学業の関心等、礼儀や意思の表明、参加意欲や学業の関心等が上昇している。

・4年生

標準的な範囲にある。1回目と比べ2回目では他人への称賛や率先して行動する意識が上昇している。

エ 生徒の変容した姿

- ・学年が進むにつれ、「自立と自律」を生徒自身が意識し、卒業年次には「大人になる覚悟」をして大きな成長を遂げる者も多くなり、生徒の成長を確認できた。
- ・SGEの実践を通して、人とのつながりができることにより、学校の中に自分の居場所ができ、さらに、個別カウンセリングを通して、人に受け入れてもらっていることを感じたり、適切な助言をもらえたりすることで、元気に学校生活を送ることができる生徒が増えた。
- ・今年度は保護者や医療機関との連携を強化し、各専門家からの助言が得られたこともあり、教員の支援を素直に受け入れる生徒が増えた。
- ・授業を落ち着いて受ける生徒、学校行事で仲間と協力して取り組む生徒、教員と対話できる生徒が増えた。

2 課題

ア 各教員が、自らSGEの指導を行えるよう、スキルアップのための研修を充実させる必要がある。

イ 当プログラムの成果を「ほっと」や教育相談などとの関連に目を向けて、授業や行事など学校全体の取組に波及させる必要がある。

ウ 新入生が入って来た直後から人間関係づくりのためのSGEを実施する必要がある。

エ 外部研修に、より多くの教員が参加する体制づくりを進める必要がある。

3 次年度に向けて

ア 生徒が当プログラムで学んだことを授業や学校行事などの学校活動全体に広げることができるように工夫する。

イ 関係者（保護者、スクールカウンセラー、医療機関など）との連携を明確にし、組織としての支援を強化する。

ウ 個々の取組を整理し、系統立てることで、誰が担当しても共通して指導できる体制を作る。この体制を通して、1・2年生での「緊張感をほぐして、仲間を作るトレーニング」、3・4年生で進路に対応できる「ソーシャルスキルトレーニング」などの機会を生徒に安定して提供していきたい。

北海道上ノ国高等学校

課程 全日制
 学科 普通科
 生徒数 79名

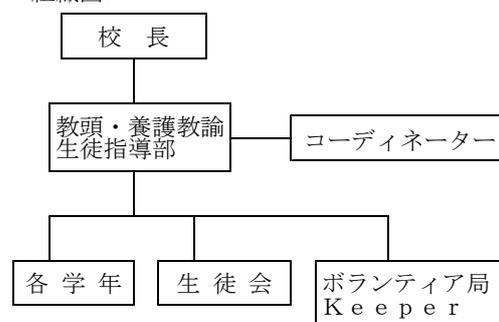
1 取組の特徴

- 1 各学年におけるコミュニケーション・スキルアップと対人適応能力の伸長を図り、自己実現及びキャリアデザインの育成に取り組む。
- 2 地域社会や小・中学校と連携したボランティア活動により、生徒のコミュニケーション能力や自己理解能力、他者理解能力及び共感力の育成に努める。
- 3 「全教職員による」教育相談を実施し、生徒情報の共有と適切でタイムリーな指導につなげる。

2 取組のねらい

- 1 子ども理解支援ツール「ほっと」・学校環境適応尺度「アセス」の調査結果を活用し、教職員による個別相談を一層充実させるとともに生徒同士が互いに認め合うことができる機会を授業やHRに設けること。
- 2 さまざまなボランティア活動を体験することで人間関係の広がりや自己理解力が深まり、望ましい人間関係づくりの進展と学校不適応の未然防止を図ること。
- 3 生徒が自己理解・他者理解を深め、対人適応能力や社会性の改善を図り、地域でのよりよい人間関係づくりを図る。

<組織図>



※「Keeper」とは、本校独自プロジェクトクラブ「KEEP」参加生徒のこと。「KEEP」とは、グローバル人材の育成を目指し、ボランティア活動等の体験活動を通じて英語力向上を図る取組を行うクラブ活動である。

3 取組の経過

- | | |
|--|--|
| <p>4月 全校クリーン作戦
(全校生徒によるボランティア清掃)</p> <p>7月 発達支援ボランティア活動(月1回)
(ボランティア局による小学生との交流)</p> <p>8月 子ども理解支援ツール「ほっと」の実施①
学校環境適応尺度「アセス」の実施①
集団カウンセリング①(全校生徒対象)</p> <p>9月 「交通安全キャンペーン」
(生徒会執行部、ボランティア局による小・中・高合同活動)
集団カウンセリング②(2学年対象)
集団カウンセリング③(3学年対象)</p> <p>10月 「本物の森再生植樹祭」</p> <p>10月 集団カウンセリング④(1学年対象)</p> <p>10月 集団カウンセリング⑤(2学年対象)</p> | <p>10月 エボラ出血熱予防活動支援募金活動
(KEEP募金活動)</p> <p>11月 上ノ国町高齢者スポーツ大会
(ボランティア局手伝い)
集団カウンセリング⑥(1学年対象)
集団カウンセリング⑦(3学年対象)</p> <p>12月 集団カウンセリング⑧(全校生徒対象)
教員研修
子ども理解支援ツール「ほっと」の実施②
学校環境適応尺度「アセス」の実施②
「喫煙防止出前授業」(小学生)
(ボランティア局ピア・サポート活動)
「英語出前授業」
(KEEPピア・サポート活動)
高齢者あての年賀状作成
(ボランティア局によるふれあい活動)</p> |
|--|--|

4 取組の内容

1 子ども理解支援ツール「ほっと」の分析結果概要

1学年は、13項目すべてが若干全道平均を下回っていたが、2、3学年は全道平均とほぼ同じであった。全校生徒対象分も含めると各学年4回の集団カウンセリングを行った。12月の「ほっと」の結果では、各学年とも「率先」の項目が改善された。特に2学年については、すべての項目が上昇した。

2 集団カウンセリング実践例

(1) ねらい

お互いの良いところを認めるためには、自分自身を大切に思う（自己受容）ことが重要であることから、少し深めの自己開示を行い、他者から受容されることを体験し、さらなる自己受容を促進するとともに他者理解を深める。



(2) 対象

2学年

(3) 内容

「私の幸せ・あなたの幸せ」「手の中にあるもの」「シェアリング」

(4) 成果

身近な他者の価値観が自分にどんな影響を与えているのかを伝え合うことで、自己理解を深め、「温かい言葉がけスキル」を使いながら感想を述べ合うことで、温かい人間関係を築くことができた。

5 次年度に向けて

1 成果

(1) 中途退学者及び不登校生徒数の推移

中途退学者及び不登校生徒数は減少傾向にある。

(2) その他の指標による評価

ボランティア活動等体験活動参加人数（延べ人数）

	24年度	25年度	26年度(1月末)
参加者数	191人	219人	227人

(3) 子ども理解支援ツール「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

ア 1学年

「率先」の項目が上昇した。

イ 2学年

すべての項目が上昇した。

ウ 3学年

2年生の時と比べ、ほぼすべての項目において上昇した。

(4) 生徒の変容した姿

自己理解とあわせて他者理解が進み、多様な考えや意見についての理解が深まった。アンガーマネジメントを理解し、良い関係を築くコミュニケーションを取ろうとする態度が見られるようになった。また、学習に積極的に取り組み、進路実現に向けて着実に取り組む態度が見られるようになった。

5 次年度に向けて

2 課題

自己理解や他者理解、多様性の理解の重要性については、繰り返し多くの活動の中で触れられているので、知識として生徒の理解は深まっていると思われる。しかし、日常的な行動に表れているとは言いがたい。様々な体験を通して、自己表現力やコミュニケーション能力を育成し、自己実現・進路実現につなげていく必要がある。

3 次年度に向けて

様々な活動の場を設定し、新しい試みにも積極的に挑戦できる態度や自ら考え行動する態度を育み、地域との連携のもと目に見える成果を導く実践に取り組みたい。

北海道奥尻高等学校

課程 全日制
 学科 普通科
 生徒数 45名

1 取組の特徴

スクールカウンセラーとの連携により、生徒のコミュニケーションスキルの育成、教員のカウンセリング能力の更なる向上、教育相談体制の確立を図る。

2 取組のねらい

- 1 生徒のコミュニケーションスキルを育成し、良好な人間関係を構築できるようにする。
- 2 教員の教育相談スキルの一層の向上を図り、生徒が安心して生活できる環境づくりを推進する。
- 3 教員による生徒理解をより一層深め、効果的な生徒指導を推進する。

<組織図>



3 取組の経過

- | | |
|--|---|
| <p>5月 緑の募金運動への協力(ボランティア局) 「ほっと」の実施①
校門前・前庭の花壇・プランター作り (環境委員会・ボランティア局)</p> <p>6月 外部講師によるコミュニケーションスキルトレーニング①、教員研修会①</p> <p>7月 「アセス」の実施① (全学年)</p> <p>9月 全教員による教育相談の実施①
外部講師によるコミュニケーションスキルトレーニング②、「ほっと」の実施②</p> <p>10月 「アセス」の実施② (3学年)</p> | <p>11月 おくしりふれあい広場への協力
校門前・前庭の花壇・プランター作り (環境委員会・ボランティア局)
性に関する講話 赤ちゃんふれあい体験 (3学年)
赤い羽根共同募金運動への協力 (ボランティア局)</p> <p>12月 「アセス」の実施(1, 2学年)</p> <p>1月 外部講師による教員研修会②</p> <p>2月 全教員による教育相談の実施②
性に関する講話 (1, 2学年)</p> |
|--|---|

4 取組の内容

- 1 生徒を対象としたコミュニケーションスキルトレーニング
 - (1) ねらい：生徒のコミュニケーションスキルトレーニングを育成し、良好な人間関係を構築できるようにする。
 - (2) 対象：全学年
 - (3) 内容：日本ピア・サポート学会理事の齋藤敏子氏を講師に迎え、話の聴き方や話し合いの仕方を学んだ。
 - (4) 成果：異学年交流を促進し、より良い話の聴き方について考えを深めた。生徒からは「しっかりと相手の話していることを理解して聴かなければいけないと思った」「ただ聞くだけでなく、質問などを相手にすることで、コミュニケーションがもっととれるようになる」「話を聴く姿勢によって話しやすさが変わった」との声が寄せられた。



4 取組の内容

2 全教員による教育相談の実施

- (1) ねらい：自分の気持ちを表現できる場を確保し、生徒が安心して学校生活を送ることができるようにする。また、本校の組織的な教育相談活動を推進する。
- (2) 対象：全学年（2回目は1，2学年のみ）
- (3) 内容：管理職も含めた全教員14名が教育相談を実施する。事前にアンケートを実施し、生徒は相談者を選択できる。
- (4) 成果：2月に生徒対象のアンケートを実施し、面談の満足度を調査したところ、「満足している」「やや満足している」の合計が96.3%だった。また、「気になっていたことが解決した」「支えになる声をかけてもらった」との声があった。

3 ボランティア活動（おくしりふれあい広場への協力）

- (1) ねらい：自主性、社会性、コミュニケーション能力を育み、自己有用感を高める。
- (2) 対象：ボランティア局員3名
- (3) 内容：レクリエーションの準備等
- (4) 成果：地域住民と交流を深め、大会運営に協力することで達成感を味わうことができた。



4 教員研修会

- (1) ねらい：「ほっと」を活用したコミュニケーションスキルの指導について学ぶ。
- (2) 対象：教職員
- (3) 内容：北海道医療大学の富家直明氏を講師に迎え、「ほっと」の分析について本校の事例を交えながら分析方法とコミュニケーションスキルの指導の実際について学んだ。

5 次年度に向けて

1 成果

- (1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移ともに前年度と同数であった。
- (2) その他の指標による評価
現段階で、保健室利用者数に大きな変化はみられない。
- (3) 子ども理解支援ツール「ほっと」の実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況
1学年においては、「礼儀」「参加」「拒否」「忠告」「相談」以外の項目が上昇した。2学年においては、1回目と比較的低かった「礼儀」「遵守」「学業」が2回目において特に上昇した。3学年においては、すべての項目が上昇したが、「学業」が特に上昇した。
- (4) 生徒の変容した姿
コミュニケーショントレーニングの感想から、「聞くということについては、私語をしないことも大切だが、話の内容を理解しないと意味がないということが分かった。普段の生活から気をつけていきたい」「自分は話し合いの時、あまり相手の意見に耳を傾けていない気がした。相手の意見を尊重しながら話し合いを進めようと思った」等の感想があった。各種取組が、自身の生活態度を振り返るきっかけとなり、コミュニケーションに関する技法を身につけたことが伺えた。

2 課題

- (1) 教員間の教育相談の重要性に関する認識の差を埋める必要がある。
- (2) 「ほっと」や「アセス」は、特定の教員だけでなく、全教員が分析し、生徒への対応に活かせるようにする必要がある。
- (3) 外部講師から得た予防的な教育相談の発想を、日常的な教育活動の中に取り入れる必要がある。

3 次年度に向けて

- (1) 「ほっと」や「アセス」について、教員が各自で結果の読み取りを行い、生徒への対応に活かすとともに、事例を蓄積し、分析結果の比較検討を進めていく。
- (2) 異年齢交流の促進や、自ら進んで他者に働きかける体験をとおして、自己有用感等を育む予防的な教育相談に努めることを日常的な教育活動の中で意識し、生徒への指導に当たる。